

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720213

研究課題名(和文) ホジェン語の音声・映像資料による電子コーパスの構築及びそれに基づく記述研究

研究課題名(英文) Hezhen

研究代表者

李 林静 (LI, Linjing)

成蹊大学・法学部・准教授

研究者番号：40567418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：中国黒龍江省で話されている消滅の危機に瀕したホジェン語(ツングース諸語)について、フィールド調査で得られた音声・映像データを分析し、また過去に出版されたテキストから電子テキストコーパスを構築した(そのうちテキスト4編を公開した)。そのコーパスを利用してホジェン語の記述研究を行い、特に動詞の屈折形式およびその統語機能を明らかにし、口頭発表および論文の形で公表した。

研究成果の概要(英文)：This is a research project of descriptive study on Hezhen(Tungusic Languages), an endangered language spoken in Heilongjiang of China. The research was performed by building corpus from audio-visual materials through the fieldwork and published texts in Hezhen. As results of the project, 4 texts and a paperwork on Hezhen verbal inflectional forms and their syntactic functions were published.

研究分野：記述言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ホジェン語 ツングース諸語 テキストコーパス フィールド調査 中国黒龍江省 危機言語 記述言語学

1. 研究開始当初の背景

中国黒龍江省に居住するホジェン族によって話されるホジェン語はツングース諸語(ロシア西シベリアから中国東北部にかけて分布する。中国領内4言語(満州語など)、ロシア領内8言語(ナーナイ語、ウデヘなど))の一つである。ホジェン語の話者(2014年現在、10人未満)の大半がロシアとの国境にあるアムール川、ウスリー川沿岸に居住しているため、外国人の研究者が入りにくく、中国人の研究者しか自由に長期調査を行えない状況が続いていた。日本国内では、田村健二(1992)による名詞の所有表現について、津曲敏郎(1993)による満州語の影響について、風間伸次郎(1996)によるホジェン語の系統的な位置についての研究があるが、これらいずれも主に文献資料に基いた断片的なものである。また、関連のある研究として、于曉飛(2005)によるホジェンの継承文芸である英雄叙事詩イマカンについての研究がある。

ホジェン語のフィールド調査から得た音声・映像資料に基づく本格的な記述研究は、本研究代表者がこれまで行ってきた研究が主要なものとして挙げられる。「ホジェン語の格体系と動詞活用体系」(2003)では、ホジェン語の格表示として、we~me、du、dule~le、tiki、jiの六つの格語尾を認め、形態論の観点から動詞の活用体系について記述を行い、格体系及び動詞屈折接辞の体系を明らかにした。「ホジェン語の「-mi/-m」と「-re」について」(2003)では、先行研究の-mi/-mと-reという二つの副動詞の機能についての記述を、代表者の得たデータによって検証した。さらに、-mi/-m+birenと-re+biren(両方とも日本語の「~している」にあたる)という形に注目し、両形式と共起する動詞のアスペクトの性質が異なることについて指摘した。-re+birenという形式についての言及は本稿が初めてであり、両者の違いについての分析も本稿が初である。これらの結果については第128回日本語学会で口頭発表を行った。さらに、データを充実させ、前稿を改善したものを第2回国際満州ツングース言語文化学会で発表した。上述のbirenはbi(「ある、いる」)の三人称単数非過去形であるが、その後の調査によって、他の人称と時制を含む網羅的なデータが得られたため、「ホジェン語のアスペクト体系」(2004)では、-mi/-m biと共起する動詞は動作動詞、-re biと共起する動詞は変化動詞であることを指摘し、ホジェン語のアスペクト体系を提示した。「ホジェン語の動詞構造」(千葉大学大学院社会文化科学研究科提出博士論文、2006)では、ホジェン語文法において、核心的な位置を占める動詞構造の全体像を明らかにした。「ホジェンの皮加工の工程及び道具の名称」(2007)では、これまでほぼ記録のない魚皮衣、獣皮衣に使う魚皮、獣皮の加工技術について記述を行い、道具の名称及び工程のホジ

エン語による記録を行った。『ニューエクスプレス・スペシャル日本語の隣人たち』(中川裕監修、白水社、2009)では、ホジェン語部分の執筆を担当し、ホジェン語における日常会話のスキット3篇を提示し、名詞の所有表現、動詞の構造などについて簡明な解説を加えた。これらの記述研究の基盤として、特に中国黒龍江省街津口郷におけるフィールド調査による音声・映像データの収集に力を入れている。2001年を皮切りに10年間、毎年一ヶ月ほどの現地調査を行ってきた。2001年に中国黒龍江省街津口郷にて基礎語彙の収集を行った。2002年には格表示及び動詞の屈折接辞、2003年には動詞のアスペクト、2004年には動詞の自他と使役表現を中心に調査を行った。これらの文法調査と平行に、民話、日常会話、伝統生活についての語りの音声資料も採録してきた。2005年2月に博士論文の執筆に当たり、現地でこれまでの音声資料の確認作業を行い、2005年9月に博士論文を完成させるためにホジェン語の動詞構造についての補足調査を行った。2003~2006年度には「アイヌを中心とする日本北方諸民族の民具類を通じた言語接触の研究」(研究代表者:中川裕)に、2009年度~2010年度には「少数言語の言語資料のデータベース作成とオンライン公開」(LingDy 若手共同研究支援プログラム/研究代表者:長崎郁)に研究協力者として参加し、精力的にフィールドにおけるデータの収集に取り組んでいる。

国内において、本研究の対象であるホジェン語の調査と記述研究に本格的に取り組んでいるのは代表者ただ一人であり、特に動詞の形態論的記述研究に関しては、世界的にもリードしている。

国外では1980年代後半に中国人研究者による簡略な文法ハンドブックが同時期に3冊出版されている。各研究者間の記述は食い違いが大きく、記述が不十分であるなどの問題があった。近年、中国で64の少数言語が消滅の危機に直面しているとの研究結果が発表され、ホジェン語はさらに最も危機的状況の「すでに消滅寸前」の言語に分類されているにもかかわらず、言語学者による記述研究は現在ほとんど行われていない。

2. 研究の目的

本研究は、代表者がこれまでフィールド調査によって得られた、消滅の危機に瀕したホジェン語の音声・映像資料及び過去に出版されたテキスト資料を電子化・分析し、テキストコーパスを構築し、それに基づく記述研究を進めることを目的とする。特に動詞の屈折形式とその統語機能についてこれまでより詳細に、体系的に記述を行った。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、以下のような手順で計画を進めた。

(1)フィールド調査による新たな音声・映像資料の収集

毎年8月-9月に、ホジェン語話者の居住地である中国黒龍江省同江市街津口郷、八岔郷においてフィールド調査を4週間程度実施した。ホジェン語話者との面接調査では、語彙調査、形態論と統語論にかんする聞き取り調査、複数の話者による会話の録音・録画を行い、新たなホジェン語音声データおよび映像データを収集した。

(2)これまでに収集された音声・映像資料の電子化

過去に記録されたアナログオーディオテープによる録音資料や、アナログビデオテープによる映像資料のデジタル化を行い、コンピュータで処理できるように加工した。

(3)音声・映像資料からテキストを起こしてテキストデータ化

電子化された音声・映像資料からテキストを抽出し、フィールド調査の際に、過去に採録したホジェン語テキストの文字化作業を行い、話者の助力を得て確認作業を行った。また調査後も音声・映像資料の書き起こしを継続した。

(4)これまでに収集された出版物のテキストの電子化

これまでに出版されたホジェン語テキストを収集し、コンピュータによりテキストを入力して電子データ化を行った。

(5)テキストデータ化された資料を分析用に加工し、テキストコーパスを構築

FLEX (FieldWorks Language Explorer) を用いた資料の分析と整理、英訳・日本語訳・中国語訳の作成を進めた。

(6)テキストコーパスを用いて、ホジェン語の記述研究を行う

4. 研究成果

(1)現地調査

毎年8月~9月に4週間程度、ホジェン語話者の居住地である中国黒龍江省同江市街津口郷、八岔郷においてフィールド調査を実施した。話者が年々減少し、ついに一桁までとなった現在において、複数の話者による会話の録音・映像資料を収集するのが極めて困難となった状況の中で、新たな日常会話の録音・録画、また単独の話者による録音・録画を行い、音声データおよび映像データを収集することができた。本調査では、合計約64時間分の録音データおよび約14時間分の録画データが得られた。

(2)過去の音声・映像・文字資料の電子化

過去に記録されたアナログオーディオテープによる録音資料や、アナログビデオテ

ープによる映像資料のデジタル化を行い、コンピュータで処理できるように加工した。

また、これまでに出版されたホジェン語テキストを収集し、コンピュータによりテキストを入力して電子データ化を行った。

(3)テキストコーパス構築

収集・加工した電子データからテキストコーパスを構築し、その一部としてテキスト4編(民話、インタビュー、会話形式)を公開した。そのうち、インタビューおよび会話形式のテキストはこれまでほぼ皆無であった。FLEX (FieldWorks Language Explorer) を用いて資料の形態素分析を行うことにより、辞書作成の準備も進めることができた。またデータベースを利用してホジェン語の記述研究をおこない、次項にあげる成果を発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

李 林静、「ホジェン語の動詞屈折形式とその統語機能」『北方言語研究』4. 111-126. 北海道大学大学院文学研究科, 2014.

李 林静、「ホジェン語の会話テキスト(2)」『ユーラシア言語文化論集』第15号. 千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座, 2013年.

李 林静、「ホジェン語インタビューテキスト(1) - お産について - 」『北方言語研究』2. 183-216. 北海道大学大学院文学研究科, 2012.

李 林静、「ホジェン語インタビューテキスト(2) - お産について - 」『ユーラシア言語文化論集』14. 307-340. 千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座, 2012.

李 林静、「ホジェン語民話テキスト 蛇兄妹」『ユーラシア言語文化論集』13. 131-153. 千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座, 2011.

[学会発表](計 3 件)

李 林静、「ホジェン語の動詞屈折形式とその統語機能」AA 研共同利用・共同研究課題「準動詞に関する通言語学的研究」2013年度第2回研究会, 2013年10月19日, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

李 林静、「ホジェン語の非人称形動詞について」AA 研共同研究プロジェクト「北方諸言語の類型論的比較研究」2012年度第1回研究会, 2012年06月02日, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

李 林静、「ホジェン語の非人称形動詞と受動態について」, 千葉大学文学部日本文化学科ユーラシア言語文化論講座研究会 2012

年度第2回研究会、2012年07月27日、千葉
大学文学部ユーラシア言語文化論講座。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 林静 (LI LINJING)

成蹊大学・法学部・准教授

研究者番号：40567418